

平成31年度春季展

旧藩祖三百年祭と

前田利家



前田利家座像(「旧藩祖三百年祭等各町催物画」090-1221(4))

平成31年4月27日(土)～6月23日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

はじめに

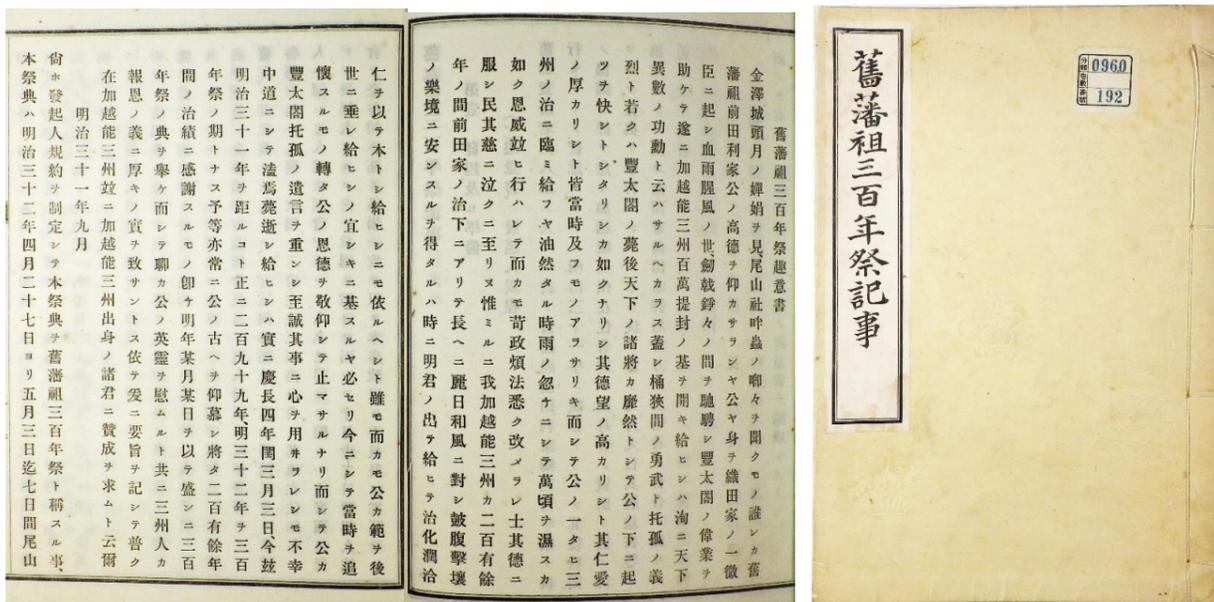
毎年6月、金沢市では、加賀藩祖前田利家の金沢入城を記念した「百万石まつり」が開催されています。尾山神社の封国祭を前身とする「百万石まつり」は、城下町金沢の最大の祭であり、現在も「加賀百万石」の基礎を築いた前田利家の名とその偉業を語り継いでいます。

こうした加賀藩や前田家を記念したイベントは、約150年ほど前の明治時代にも行われていました。その一つが、明治32年（1899）に開催された「旧藩祖三百年祭」です。メインイベントとなる神輿の渡御行列は「百万石行列」を彷彿とさせ、全町をあげて賑わう様子からも「百万石まつり」のルーツの一つと言えます。その時の様子を描いたものが、当館が所蔵する「旧藩祖三百年祭等各町催物画」です。

今回の展示では、「旧藩祖三百年祭等各町催物画」から旧藩祖三百年祭で賑わう金沢の様子を紹介するとともに、藩祖前田利家について、当館所蔵史料を用いて紹介します。

1. 旧藩祖三百年祭

明治32年（1899）4月27日から5月3日の7日間にかけて、尾山神社を中心に旧藩祖三百年祭が開催されました。明治32年は、藩祖前田利家の命日である慶長4年（1599）から300年目の節目であり、藩祖の偉業を讃えるため、旧加賀藩八家により企画・開催されました。

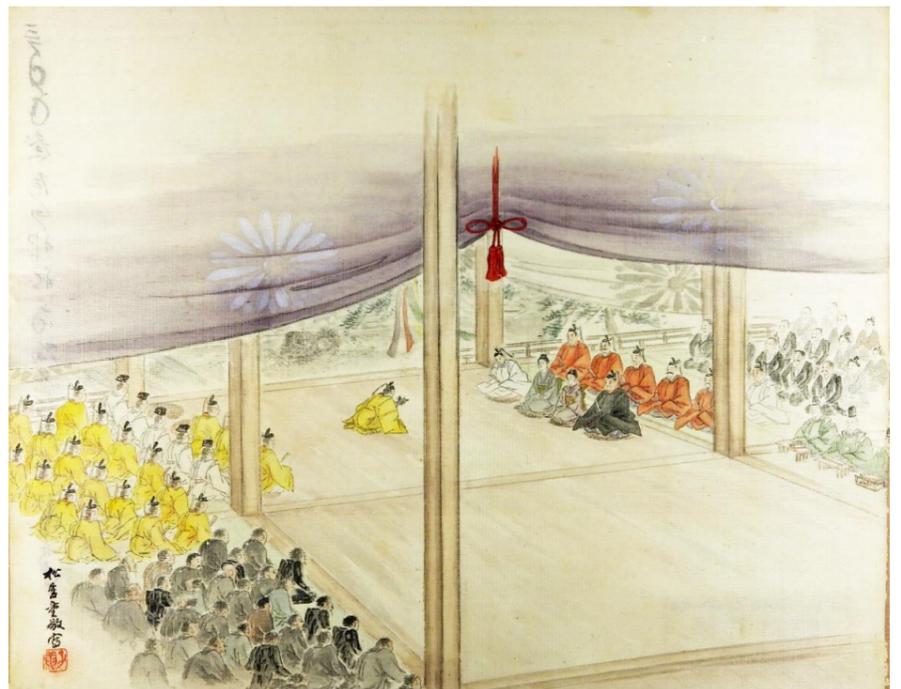


旧藩祖三百年祭趣意書(「旧藩祖三百年祭記事」) 096.0-192)

祭式は尾山神社で7日間執り行われました。特に、初日の4月27日は、藩祖前田利家の命日（慶長4年閏3月3日を太陽暦に換算した日）であることから、祭式は厳粛に行われました。また、侯爵前田利嗣や前田家関係者が参拝する4月29日の祭式は、金沢市民の関心も高く、会場である尾山神社は参拝者であふれかえるほどでした。



尾山神社 尾山神社神門 090-1221(1)



尾山神社 尾山神社拜殿式典 090-1221(2)

メインイベントである神輿の渡御行列は、5月1日から行われ、1日目は犀川口を、2日目は浅野川口を渡御しました。また、尾山神社境内などでも、能楽・弓術・相撲・競馬・煙火などのイベントが連日催されました。



神輿渡御行列前駆
090-1221(16)



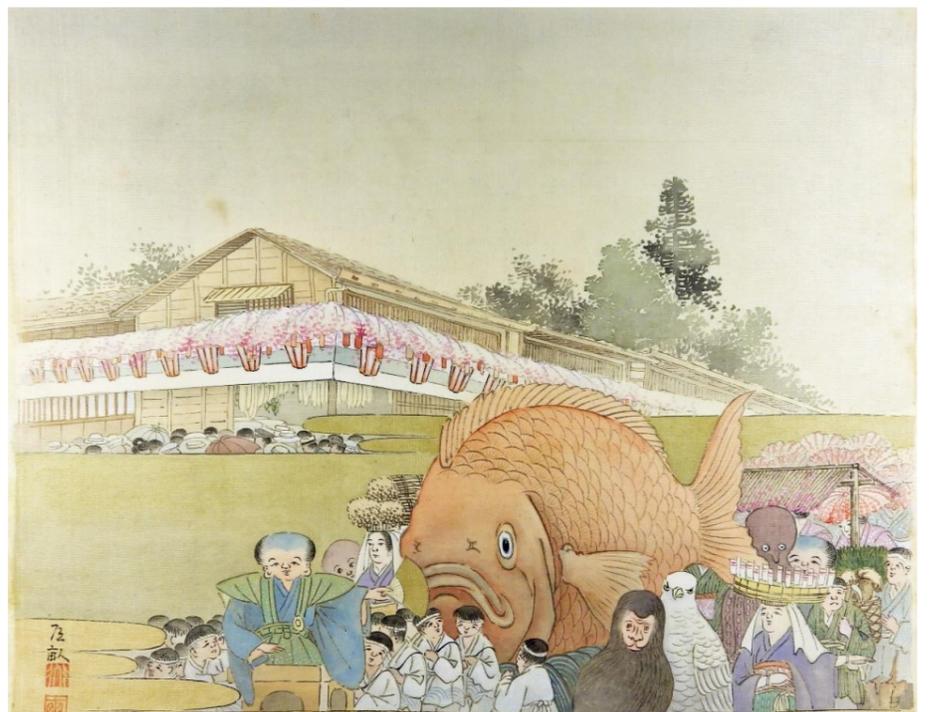
尾山神社 境内角力
090-1221(9)

神輿の渡御行列の順路（「旧藩祖三百年祭記事」096.0-192 より）
 1日目（犀川口）…… 尾山神社 → 金谷館 → 十二銀行 → 南町本通り → 犀川大橋 → 野町泉野神社 → 柿木島 → 広坂 → 千石町 → 尾山神社
 2日目（浅野川口）… 尾山神社 → 千石町上小路 → 南町 → 上堤町 → 十間町 → 浅野川大橋 → 卯辰神社 → 森下町 → 東馬場町 → 小橋 → 彦三一番街 → 新町 → 袋町 → 青草町 → 松原町 → 尾山神社

金沢の各町内では、梅鉢の幕を張り、長提灯を吊るして祭を祝い、剣舞・祇園囃・作り物の屋台・獅子など、工夫を凝らした出し物が催され、市内は多くの人で賑わいました。



天神町 獅子・若連中にわか
090-1221(84)



近江町 大鯛造り物の山車と子供仮装行列
090-1221(31)

2. 藩祖前田利家

「加賀百万石」の基礎を築いた前田利家は、天文6年（1537）に尾張国荒子村の土豪前田利春（利昌）の4男として生まれました。幼名を犬千代といい、元服して「孫四郎」利家、のちに「又左衛門尉」利家と名乗ります。

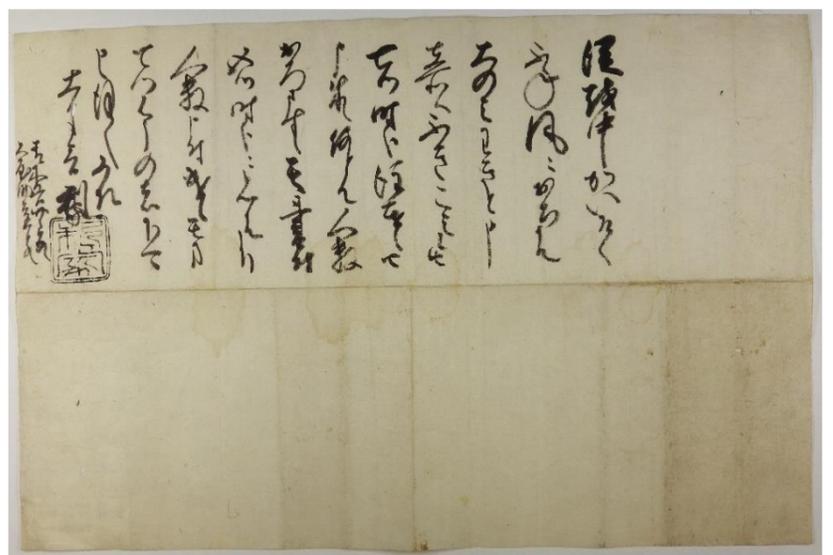
天文20年（1551）、利家は織田信長に仕え、信長の飛躍とともに出世していきます。天正3年（1575）には越前府中3万3000石の大名となり、同9年には能登一国を与えられ、はじめて国持大名となりました。

天正10年の本能寺の変で信長が倒れると、利家は信長の後継者となった羽柴秀吉を支え、前田氏の地位を固めていきます。同11年には北加賀2郡（石川・河北）を秀吉から与えられ、金沢城を居城とします。同12年には末森城を攻撃した越中の佐々成政を破り、翌13年に成政が秀吉に降伏すると、越中3郡（砺波・射水・婦負）が利家の子利長に与えられます。能登国と加賀北2郡、利長の領する越中3郡を含めた利家の領地が、「加賀百万石」の基礎となっていきます。

越中平定後、利家は豊臣大名として関白豊臣秀吉を支えます。天正18年には関東平定のため北国勢の総指揮者として出陣し、文禄元年（1592）の朝鮮出兵では肥前名護屋城で秀吉を補佐しました。徳川家康などとともに五大老の一人として豊臣政権の重責を担い、慶長3年（1598）の秀吉没後には、その遺言で秀頼を輔弼するため大坂城に入り、家康に反発する石田三成らに担ぎ出されます。家康の独断専行の兆しが見える中で、秀頼と前田家の行く末を案じつつ、利家は慶長4年閏3月3日に亡くなります。

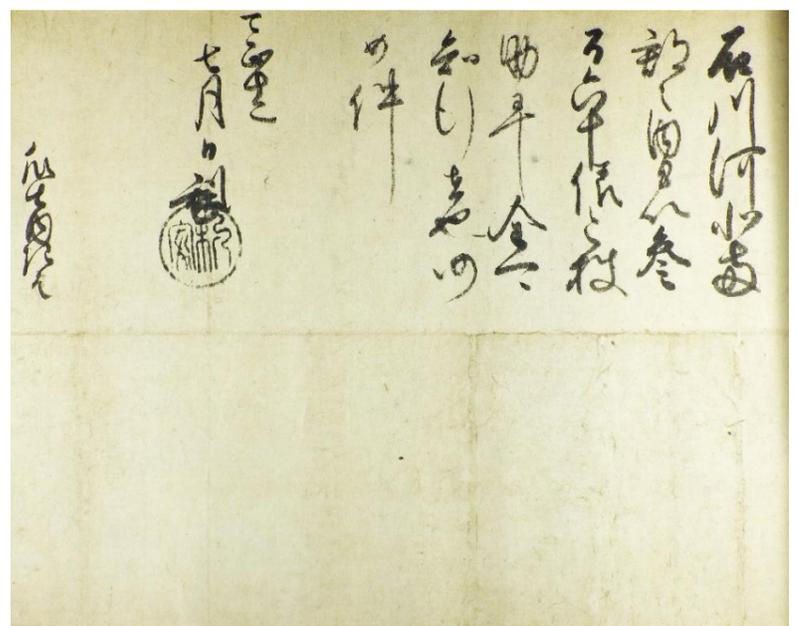


「前田犬千代の像(前田利家桶狭間凱旋図)」K7-371



「前田利家印物(越中海賊船につき)」

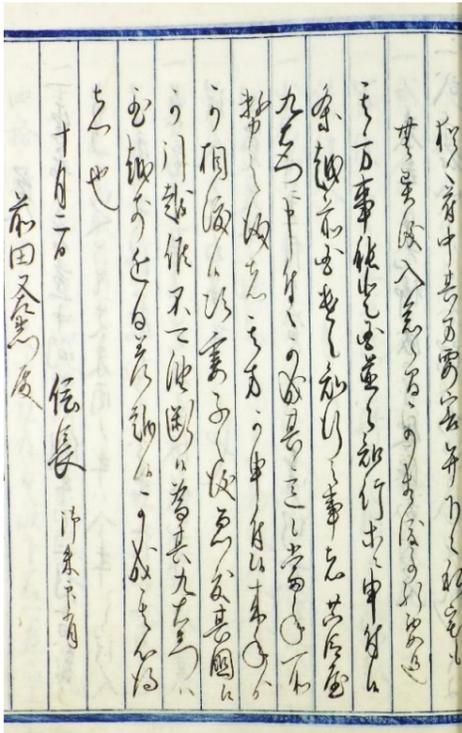
090-1286(2)



前田利家黒印状
（「群雄書巻」090-1392(1)）

3. 能登国領有の周辺

前田利家が、はじめて一国を領したのは能登国です。能登国は、戦国大名の能登畠山氏が七尾城を拠点に支配していましたが、天正5年（1577）に織田信長と敵対する上杉謙信が七尾城を攻略し、上杉方の支配下に組み込まれます。翌6年に謙信が急死したことで上杉方の支配が弱まり、やがて能登国は織田方が支配するところとなります。そして、天正9年8月、利家が信長から能登一国を与えられます。



織田信長朱印状写

(「漸得雑記」16.05-3(1))

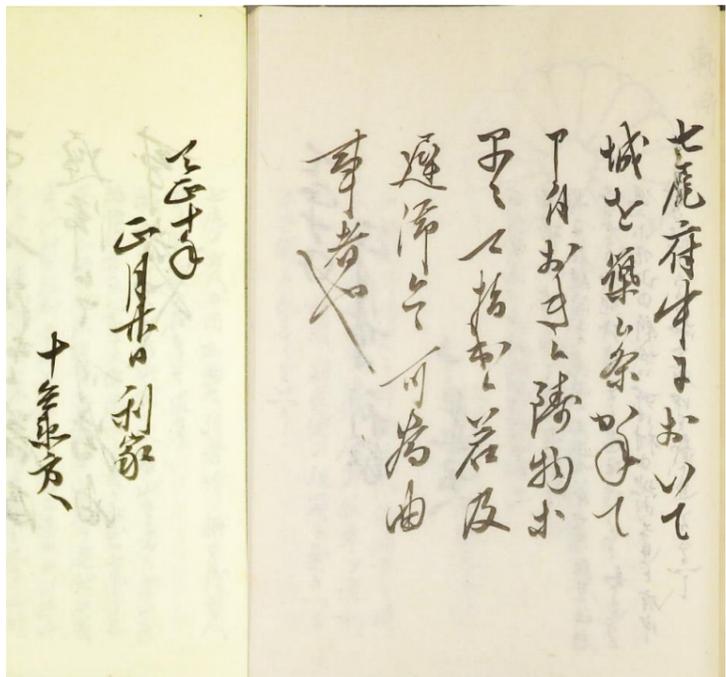


「能州七尾畠山之城図」19.9-180

信長が利家に、妻子ともども能登に移るように指示した文書の写し。利家を国持大名にした信長は、利家から越前府中城を取り上げて菅屋長頼に与えました。そして、引き継ぎのため菅屋長頼を越前に派遣するから、利家の城や家臣の家々を整備して引っ越すよう指示し、利家の妻子については必ず引っ越すように厳命しています。信長の命もあり、利家は妻子ともども能登に移り、守護畠山氏の居城であった七尾城に入ります。

利家の能登での拠点となったのは、七尾町郊外の所口村に築いた小丸山城です。標高30メートルほどの小高い丘の小丸山は、七尾湾を周航する船が一望でき、湊町七尾を押さえる上で重要な位置にあります。天正10年

(1582) 正月、利家は、守護畠山氏の居城であった七尾城を捨て、この小丸山に城を築いたとされてきました。しかし、近年の調査・研究の成果により、前田氏による七尾城改修の可能性が指摘され、また小丸山築城を示す史料の年代推定に疑問が出ているなど、七尾城の廃城時期や小丸山城の築城時期については、今後見直しが進むとみられます。



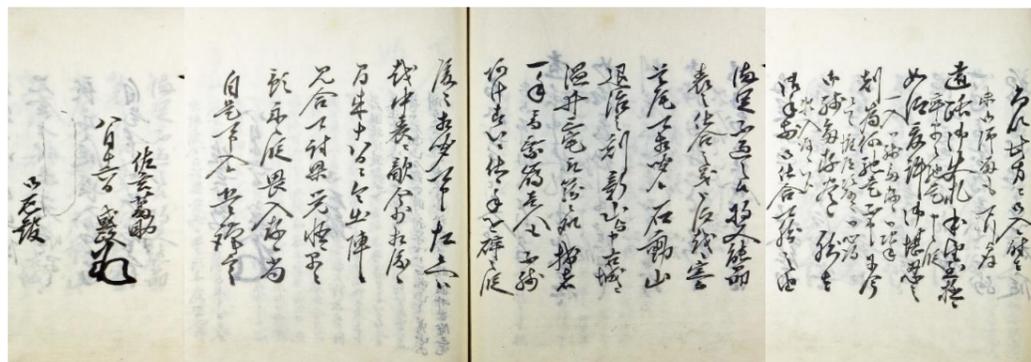
前田利家印判状写

(「加能越古文叢」16.03-4(37))

利家の小丸山築城の初見とされてきた文書の写し。原本は不明。「七尾において城を築」くとあり、天正10年（1582）に利家が七尾城を捨て、小丸山城を築いたと考えられてきました。しかし、他の小丸山（所口）築城に関する史料の年代が見直されており、このときの築城が小丸山城であったのかも再考する必要が出てきています。

能登に入った利家の前に立ち塞がったのは、上杉方に与した畠山旧臣でした。柴田勝家を中心とする織田勢は越中へ進出し、天正10年（1582）3月に富山城を攻略、続いて魚津城を取り巻きます。これに対し、上杉方の長景連や温井景隆は海路を使って奥能登へ攻め入りました。利家は急いで長連龍を帰国させ、留守を預かる前田安勝（利家の兄）とともに、上杉方を撃退させました。

しかし、同年6月に織田信長が京都本能寺で明智光秀の謀反に倒れると（本能寺の変）、上杉方の温井景隆・三宅長盛兄弟は、これを機に能登を奪取しようと、石動山に陣取ります。利家は、金沢城主佐久間盛政に援軍を依頼し、7月に石動山天平寺に攻め入ってこれを焼き払い、石動山を攻略します。援軍の佐久間盛政は高畠村に陣取り、温井・三宅兄弟が荒山城にいることを知るとこれを強襲し、温井・三宅兄弟を討ち取りました。この石動山・荒山合戦での勝利により、利家の能登支配はひとまず安定に向かいます。

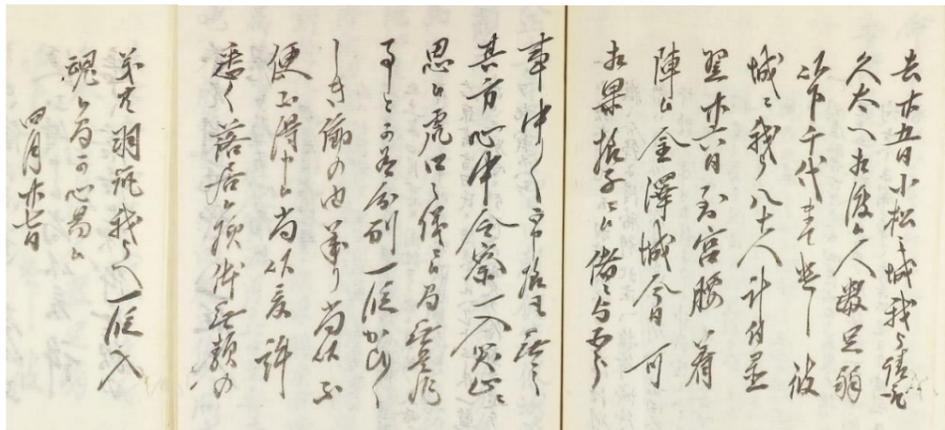


佐久間盛政書状写
（「加能越古文叢」16.03-4(38)）

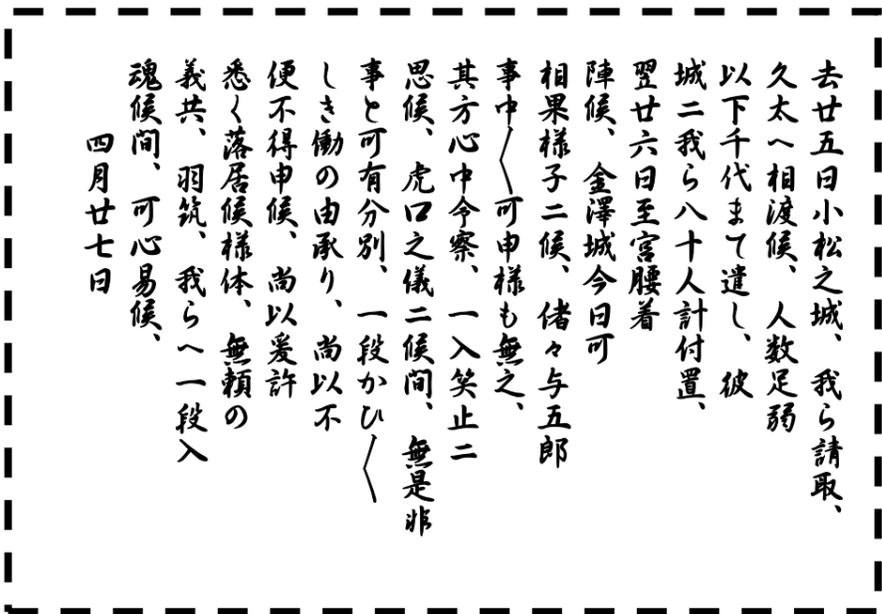
佐久間盛政が荒山合戦での勝利と越中へ出陣する旨を告げた文書の写し。利家の要請を受け出陣した盛政は、荒山城の普請に向かった温井・三宅氏を攻撃しました。能登国の奪取をこころみた温井・三宅氏は、この佐久間軍の攻撃により滅びました。

4. 加賀国領有と金沢入城

天正11年（1583）4月20日、織田信長の後継者をめぐって対立した羽柴秀吉と柴田勝家が、賤ヶ岳で戦いました（賤ヶ岳の戦い）。利家は柴田軍として参戦しましたが、翌21日に秀吉軍の反撃にあった佐久間盛政が撤退するのを見て突如退却を開始します。その結果、柴田軍は総崩れとなりました。利家は越前府中城にたどり着くと、秀吉の和議の誘いに応じて降伏し、勝家の抛る越前北ノ庄城攻めの先陣として働きます。同24日に勝家を滅ぼした秀吉は、軍を北上させて加賀国に攻め入ります。同25日に加賀国に攻め入った利家は、同27日に佐久間盛政の家臣から金沢城を接收しました。翌28日に金沢城に入った秀吉は、加賀国に禁制を掲げる傍ら戦後処理を行います。利家には旧領能登に北加賀2郡（石川・河北）を与え、利家の子利長を松任4万石に移封しました。利家は七尾から金沢城に移り、以後、秀吉方として北陸での地歩を固めていきます。



前田利家書状写
（「加能越古文叢」16.03-4(39)）



利家が初めて金沢城に入った日が、4月27日（西暦6月16日）とみられることを示す文書の写し。原本は東京大学史料編纂所が所蔵しており（富田文庫）、宛所は富田景政であることが知られます。秀吉軍の先陣として加賀に攻め入った利家は、25日に小松城を徳山秀現の家臣から接收して堀秀政に渡し、翌26日には宮腰（金沢市）に布陣します。そして、「金澤城」は今日（27日）にも「可相果様子」と富田景政に伝えています。原本によれば、この手紙を認めている間に、金沢城の佐久間盛政の家臣から城を明け渡す申し出があったと記されており、この日に金沢城を接收したことが窺われます。

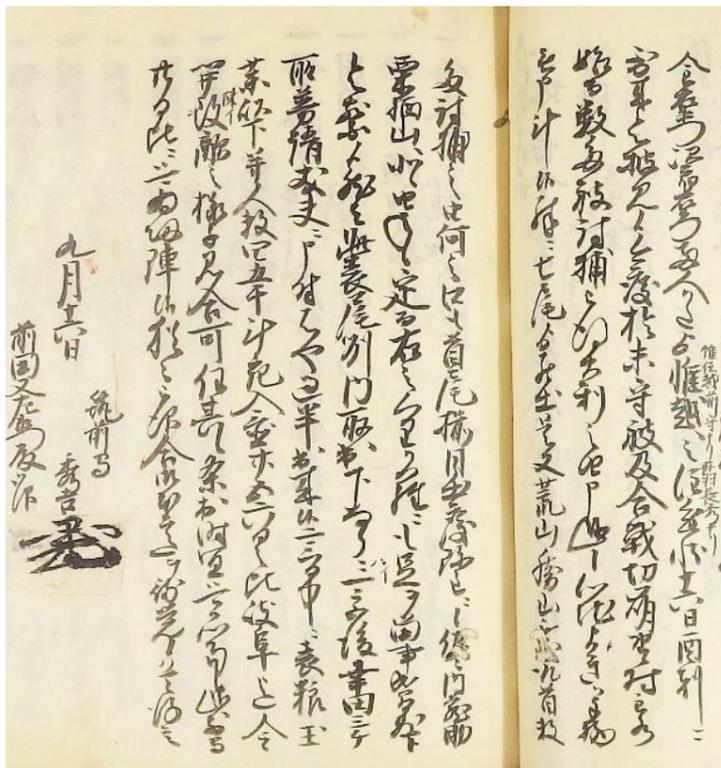
5. 末森合戦と越中国領有

天正12年（1584）3月、羽柴秀吉と織田信雄（信長の次男）・徳川家康が尾張小牧・長久手で対峙します（小牧・長久手の戦い）。戦いは、局地戦では家康が勝利したものの、同11月に秀吉と信雄が単独講和を結んだため、翌12月には家康も秀吉との和議に応じて兵を引きます。

前田利家と佐々成政が激突した末森の戦いは、この小牧・長久手の戦いに連動しておきました。同年9月9日、成政は末森城を包囲し、前田氏領である加賀・能登の分断を図りました。これを知った利家は、すぐに出陣して津幡で軍議を開き、家臣らの慎重論を退けて軍を進めます。同11日に今浜に進んだ前田軍は、末森城を囲む佐々軍の背後を急襲して破り、城内に入ります。利家が城内に入ったことを知った成政は反撃をあきらめ、兵を越中に引き上げました。



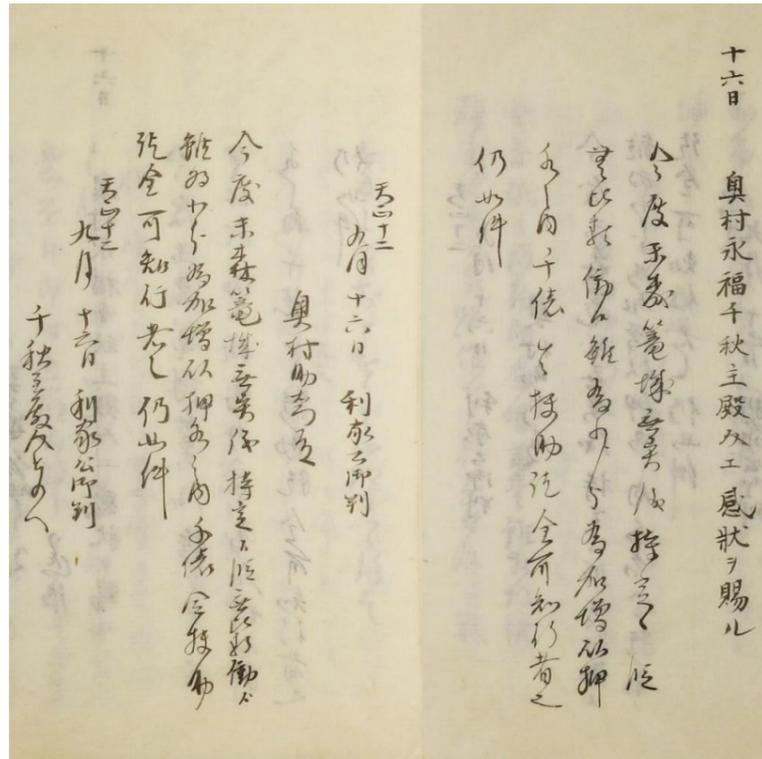
「末森合戦図」095.33-11 部分



羽柴秀吉書状写

（「たもと草・同追加」16.28-126(1)）

秀吉が利家に、末森合戦および荒山・勝山城攻略を賞し、合わせて尾張の戦況を伝えた書状の写し。秀吉は成政を追撃することも認めています、利家側にその余力はありませんでした。

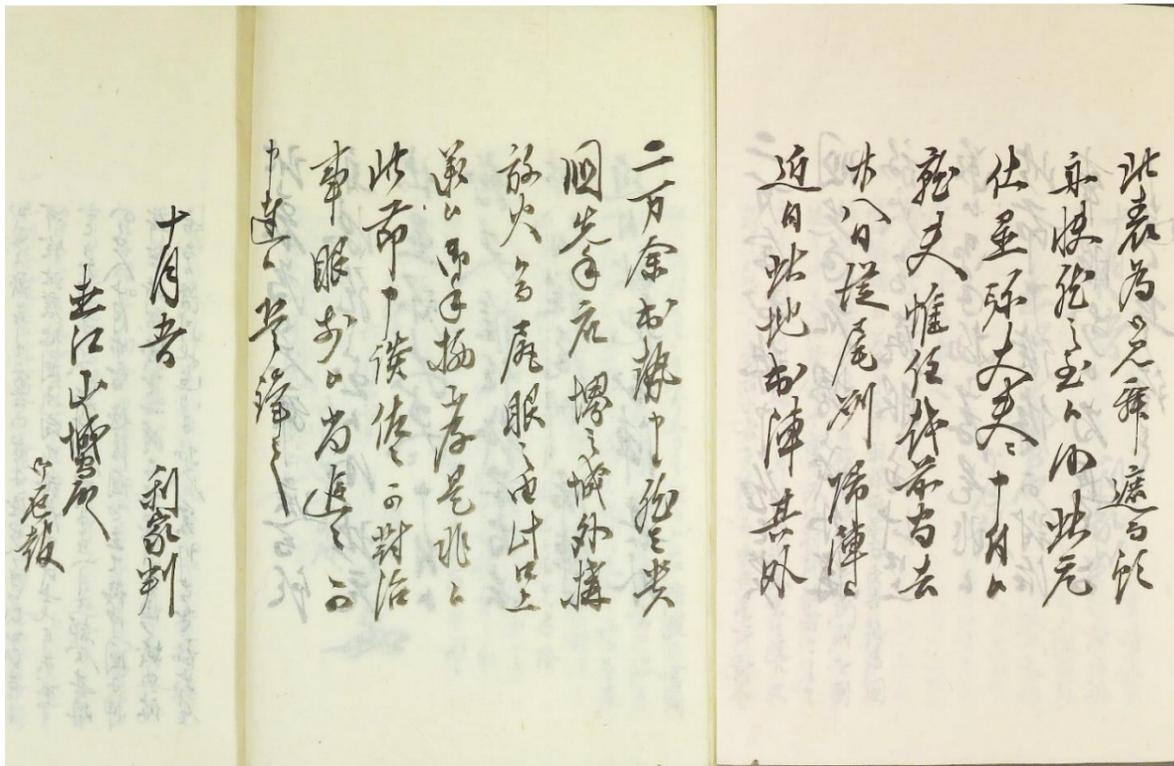


前田利家判物写

（「菅君雜録」16.12-3(2)）

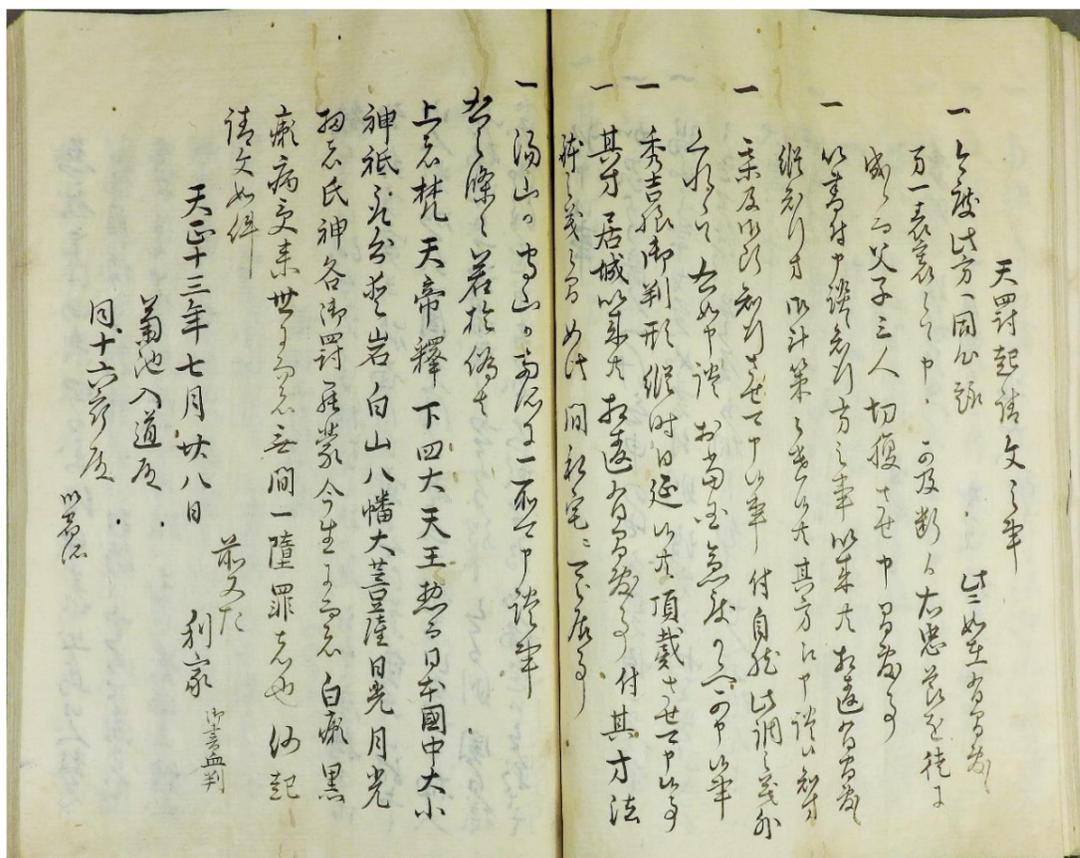
利家が奥村家福（永福）と千秋範昌に、末森籠城の功を賞し、羽咋郡押水内の地を宛行つた文書の写し。

越中に敗走した成政は、越後境を上杉氏に脅かされ孤立し、冬の立山を越えて家康に再起を促すも断られて帰国します。これに対し、利家は越中砺波郡に侵攻する一方、氷見阿尾の菊池武勝を誘引し、秀吉の越中侵攻の用意を整えていきます。成政は家康・信雄を介して秀吉に降伏を申し入れますが、秀吉は拒否し、8月に越中に出陣します。成政は、はじめ抵抗の意を示しましたがすぐに降伏し、秀吉に許されます。成政の所領は越中新川1郡となり、のこる越中3郡（砺波・射水・婦負）は利家の子利長に与えられました。末森合戦と秀吉による越中平定の結果、利家は北陸における秀吉政権の重鎮としての地位を固め、能登国と北加賀2郡に利長の越中3郡を含めた3カ国を領する大名となりました。



前田利家書状写（「加能越古文叢」16.03-4(41)）

利家が、上杉景勝の家臣直江兼続に、丹羽長秀の来援が近いことを告げた文書の写し。上杉氏は、羽柴・徳川との対立では羽柴方につき、利家と連携して成政の越中を脅かしました。利家と景勝の提携により、成政は孤立を深めていきます。



前田利家起請文写（「温故足徴」16.84-19(1)）

利家が、越中国阿尾城（氷見市）の菊池武勝・安信父子に与えた誓紙の写し。末森合戦後、利家は攻勢に転じて国境沿いの佐々方の砦や城を攻めています。特に、阿尾城は、前田側の石動山と佐々側の守山の間位置しており、戦略的に重要な拠点でした。利家は阿尾城の菊池武勝と盟約を結ぶことで、秀吉の越中侵攻の用意を整えました。